近代日本人は外国で何を見たのか？

事典 日本人の見た外国

富田 仁 編　A5・510頁

定価（本体9333円＋税）　ISBN978-4-8169-2056-1

2008年1月刊行

「木戸孝允日記」、「南極探検」、「ロシア印象記」など江戸時代〜昭和戦前期の海外見聞記377点を解説

■江戸時代から昭和戦前期までに書かれた、日本人の海外見聞記を多角的に解説した事典です。

■江戸時代の漂流記、幕末の使節団の記録、作家・芸術家の紀行・日記・渡欧詩集など377点について、著作の成立背景、著者の経歴、内容紹介、書誌事項などを詳しく紹介。

■「国別索引」「書名索引」「著者名索引」「事項名索引」付き。

収録文献例（著者、渡航先・年）

【江戸時代の漂流記】
- 「北槎聞略」　大黒屋光太夫/ロシア漂流民　ロシア（1783〜1792）
- 「漂巽紀略」　中浜万次郎/漂流民、のち英学者　アメリカ（1841〜1851）

【幕末維新の使節団】
- 「二夜語」　加藤素毛/使節団に同行した俳人　アメリカ、ハワイ（1860）
- 「万延元年アメリカハワイ見聞報告書」　福沢諭吉/思想家　アメリカ、ハワイ（1860）
- 「航西日記」　渋沢栄一,杉浦譲/幕臣 幕末最後の使節団　フランス、スイスほか（1867）

【明治時代】
- 「独逸日記」　森鴎外/小説家 『舞姫』につながる留学　ドイツ（1884〜1888）
- 「黒田清輝日記」　黒田清輝/日本の西洋画を切り開いた洋画家　フランス（1884〜1893）
- 「米国通信」　清沢洌/ジャーナリスト 若き日の米国体験　アメリカ合衆国（1907）
- 「フランスから帰つて」　高村光太郎/詩人　フランス（1910）

【大正時代】
- 「祖国を顧みて」　河上肇/経済学者　ベルギー、フランスほか（1914）
- 「東西相触れて」　新渡戸稲造/教育者　イギリス、フランスほか（1920〜1926）
- 「巴里の横顔」　藤田嗣治/パリに生きた画家　フランス（1920年代）

【昭和戦前期】
- 「欧米歌舞伎紀行」　市村羽左衛門（15代目）/歌舞伎役者　アメリカ、フランス、イギリス（1928）
- 「世界に摘む花」　岡本かの子/歌人　フランス、イギリスほか（1930〜1932）
- 「世界を私の家として」　賀川豊彦/キリスト教社会運動家　アメリカほか（1934〜1935）
- 「渡仏日記」　高浜虚子/俳人,小説家　フランスほか（1936）

……など377点

好評既刊

●16世紀から明治期までの2,102人

新訂増補 海を越えた日本人名事典

富田 仁 編

A5・940頁　定価（本体15,000円＋税）　ISBN4-8169-1933-3　2005.7刊

編者プロフィール　富田　仁　とみた・ひとし

昭和8年東京生。元日本大学教授。日本仏学史学会会長。日本フランス語フランス文学会・日本ペンクラブ所属。「舶来事物起源事典」（名著普及会）、「岩倉使節団のパリ」（翰林書房）など、著編書多数。

2017.3

お問い合わせは…　**日外アソシエーツ　営業局**　TEL.03-3763-5241（代）　FAX.03-3764-0845
〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16　http://www.nichigai.co.jp/

■貴店名	注文書	事典 日本人の見た外国 定価（本体9,333円＋税）　ISBN978-4-8169-2056-1	冊
			冊
		■お名前	

9784816920561

事典　日本人の見た外国

田辺 太一

幕末外交談（ばくまつがいこうだん）

【対象国】フランス（1864,1867,1871），ベルギー，オランダ，スイス，イタリア，イギリス（1871）

【著者】田辺 太一　たなべ たいち　天保2年9月16日（1831）～大正4年9年16日（1915）。幕臣，外交官。出生地 未詳。幼名定輔。蓮舟（れんしゅう）と号す。昌平黌教授出役で甲府徽典館の学頭であった儒学者田辺石庵の二男。太一も昌平黌で儒学を学び、甲府徽典館の教授となる。安政6年（1859）、外国奉行支配下の書物方出役となり横浜開港に関する議案の浄書、対話の筆記を担当。文久3年（1863）横浜鎖港談判使節池田長発（いけだながおき）に随行し渡仏、慶応3年（1867）徳川昭武遣欧使節の随員としてパリ博覧会に出席。明治維新後、外務少丞となり、明治4年（1871）岩倉遣外使節団に書記官長として随行。14年（1881）清国臨時代理公使。その後元老院議官などを歴任した。

【背景】太一が外国方の仕事を始めたのは、異国船打払い令、モリソン号砲撃事件、蛮社の獄、ペリー来航、安政五か国条
商条約の締結、神奈川・長崎・箱館の
渦中にあった時期であった。こうした
頭として渡仏、また徳川昭武のパリ万
の書記官長として随行するなど、国運
もって日本の外交を深慮することとな

【内容】本書の記述は、ペリー来航時の
り、勘定奉行小栗上野介の外交路線を
なり、3度遣外使節団に随行し、国際事
ばさみとなって苦慮した外交当事者と
れてつぶさに語られている。類書に見
的な印象が記されていないのも、本書
経験に基づいて記された幕末の稀有な
往事談』とともに貴重な証言であり、
国の代表として対外折衝の困難を身を
府の外交政策を批判した峻烈な評論で
ある、「安政以来慶応の末年にいたる
のを見て、予は断乎として言いたい。
を奉じて鎖攘をはかり、それを遂げ得
一訳）という述懐によく表われている。

【文献】幕末外交談/田辺太一（蓮舟）著
辺太一著 ／ 坂田精一訳校注　平凡社
東京大学出版会（続日本史籍協会叢書）

著者
海外見聞記のタイトル

事典　日本人の見た外国

黒田 清輝

黒田清輝日記（くろだせいきにっき）

【対象国】フランス（1884～1893）

【著者】黒田 清輝　くろだ せいき　慶応2年6月29日（1866）～大正13年7月15日（1924）。洋画家。鹿児島に生まれ、伯父の子爵・黒田清綱の養子となる。明治17年（1884）に法律学を勉強するため、18歳でパリに留学。中途で洋画の研究に転向、ラファエル・コランに師事した。「読書」や「朝妝」などの油彩画をサロン展に出品して認められ、明治26年（1893）に帰国。日本画壇に外光派の画風を伝える。東京美術学校の西洋画科初代教授に起用され、久米桂一郎、和田英作らと「白馬会」を結成。その後、文展審査員、帝室技芸員、国民美術協会会頭を歴任した。大正8年（1919）には、帝国美術院の創立に尽力し、晩年には、美術院院長、貴族院議員、日本工芸協会総裁などをつとめた。

【背景】明治維新の文明開化の風潮の中で、川上冬崖の弟子、高橋由一、五姓田義松らが美術としての洋画を成長させていた。そして外国で美術を学んだ人たちが、明治22年（1889）に明治美術会をつくり、最初の洋画団体として発足した。この動きを飛躍的に促進させたのが、明治26年（1893）に帰朝した黒田清輝であった。内国勧業博覧会に出品した油彩裸体画「朝妝」は女性の裸像をめぐって社会的事件にもなり、当時の人々の度肝を抜いた。黒田が中心となって結成した「白馬会」の系列からは青木繁、藤島武二らが出て文展の主流をつくり、やがて光風会へと引き継がれてゆく。

【内容】『黒田清輝日記』は全4巻からなり、第1巻には、明治17年（1884）から26年（1893）にわたる約10年間のヨーロッパ滞在中の日記や旅行記、それに東京の両親に宛てた書状が収録されている。編集者の隈元謙次郎の「はしがき」によると、書面は美術に関係あるものを選択し、相当な省略を試みたという。パリに到着した黒田は、まず私塾や中学校に入り、語学を勉強したのち法学校に入ったが、在仏の友人画家たちのすすめで油彩画の修業を決心し、コランに弟子入りした。日記と父親への書状には、法律から絵画へ転向する際の苦悩や、コラン教室、ルーブル博物館でのひたむきな研鑽ぶりがリアルな筆致で記されている。またパリ近郊のグレー村に移ってから、「読書」「休息」など数々の作品を描いた折の生活の様子や、帰国を前にしてパリで描いた「朝妝」の製作過程などもくわしく記している。また三回にわたるオランダ、ベルギーへの旅行、二回のブレハ島旅行も記録され、明治24年（1891）に画友・久米桂一郎と一緒に独仏国境を歩いた旅行記も大変興味深い記録となっている。この間には、パリ在住の原敬をはじめ、世話になった外交官、日本人画家などの動静も伝えている。国際的に活躍した日本人画家の先覚者として、また日本近代絵画の祖ともいうべき黒田の人間を知る上での貴重な日記というべきであろう。

【文献】黒田清輝日記　第1巻（明治17年～明治26年）　中央公論美術出版　1966

（滝沢忠義）

対象国
著者経歴
時代背景
内容紹介
参考文献